

宮崎市文化財調査報告書 第107集

さ ど わら じょう あと
佐 土 原 城 跡

(第8次調査)

佐土原変電所増強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



出土遺物（「天神」人形）

2015

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書 第107集

さ ど わら じょう あと
佐 土 原 城 跡

(第8次調査)

佐土原変電所増強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 5

宮崎市教育委員会



佐土原城第8次調査航空写真（真上から）

序

宮崎市は、太陽と緑豊かな宮崎県の県都として、日々発展を続けています。市内では様々な開発事業が行われていますが、それに伴って埋蔵文化財の発掘調査も行われ、宮崎の歴史を解明する新たな成果も得られています。

今回調査された佐土原城跡は宮崎市の北部にあり、中世は日向国の支配を争った大名が、近世は佐土原一帯を治めた佐土原藩主が居城とした、地域の歴史の中心を担ってきた場所です。平成24年に行なわれた発掘調査では、掘立柱建物や土坑が多数確認されました。遺物も、碗、皿や甕などの生活用具や、髪を梳く際の鬢水入れ、節句人形（天神）など、生活を窺わせる様々なものが出土しました。佐土原城跡では、これまでも武家屋敷の発掘調査が行われており、それらの比較検討も含めて、興味深い成果を得ることができました。

調査は冬に行われました。このたび報告書を刊行することができたのも、湧水が調査区内で凍る厳しい状況下で発掘作業に携った作業員の方々や、調査にご理解くださった周辺住民の方々のご協力の賜物です。末尾ではございますが、この場を借りまして、心よりお礼申し上げます。

平成27年3月

宮崎市教育委員会
教育長 二見俊一

例 言

1. 本書は、九州電力の佐土原変電所増強工事に伴う、宮崎県宮崎市佐土原町上田島に所在する佐土原城跡の第8次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成24年11月26日～平成25年2月15日の間実施した。
3. 整理作業は、平成25年12月2日～平成26年3月28日の間実施した。

調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

(平成24年度：発掘調査)

(平成26年度：整理作業)

文化財課 課長 田村 泰彦

文化財課 課長 橋口 一也

調査総括 副主幹兼埋蔵文化財係長

整理総括 副主幹兼埋蔵文化財係長

島田 正浩

島田 正浩

調査事務 主査 鳥枝 誠

整理事務 主査 鳥枝 誠

調査員 主査 金丸 武司

整理担当 主査 金丸 武司

嘱託 川野 誠也

補助員 嘱託 沼口 常子

(平成25年度：整理作業)

文化財課 課長 橋口 一也

整理総括 副主幹兼埋蔵文化財係長

島田 正浩

整理事務 主査 鳥枝 誠

整理担当 主査 金丸 武司

補助員 嘱託 沼口 常子

4. 遺構の実測・トレースは金丸・川野が、遺物の実測・トレースのうち陶磁器の実測は、一部（有）ジパング・サーベイに委託した。それ以外の遺物は沼口及び室内整理作業員が行った。
5. 出土陶磁器の判別は、宮崎県立西都原考古博物館 堀田孝博氏に依頼した。
6. 現場及び遺物の写真撮影は金丸が行った。
7. 本書で使用する北は、全て真北である。
8. 本書の執筆・編集は金丸が行った。
9. 出土遺物及び掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

目 次

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 遺跡の歴史的環境	1
第3節 調査に至る経緯	4
第4節 調査の概要	4
第Ⅱ章 調査の結果	5
第1節 基本層序	5
第2節 検出遺構	7
第3節 出土遺物	11
第Ⅲ章 調査の成果	22

挿図目次

第1図 調査区周辺地形図	2
第2図 調査区位置図	3
第3図 土層柱状模式図	5
第4図 調査区遺構分布図	6
第5図 掘立柱建物実測図1	8
第6図 掘立柱建物実測図2	9
第7図 掘立柱建物実測図3	10
第8図 土坑実測図	12
第9図 出土遺物実測図1	13
第10図 出土遺物実測図2	14
第11図 出土遺物実測図3	15
第12図 出土遺物実測図4	16
第13図 出土遺物実測図5	17
第14図 出土遺物実測図6	18
第15図 出土遺物実測図7	19
第16図 佐土原城下絵図	23
第17図 佐土原城下絵図	23

表図版

第1表 掘立柱建物観察表	12
第2表 出土遺物観察表	20
第3表 出土遺物観察表	21

第I章 はじめに

第1節 遺跡の立地

佐土原町は、宮崎平野北部の日向灘沿いに位置する。一帯は沖積平野と洪積台地、両者の中間に当たる微高地の三つに分けられる。洪積台地は宮崎層群の砂泥により構成されており、砂泥は雨水の侵食を受けて流下しながら丘陵の麓で微高地を形成する。流下が進み河川へ到達した砂泥は、沖積平野を形成する。佐土原城跡は、浸食作用の進んだ洪積台地の周囲に沖積平野が広がる、一ツ瀬川下流域の最深部に位置する。

第2節 遺跡の歴史的環境

佐土原の遺跡は、旧石器時代から縄文時代にかけて、丘陵上の平坦地を利用して形成することが多かった。弥生時代になると、丘陵上のみならず微高地にも遺跡が分布する。これは、当時平野部を利用して稲作が行われるようになったためと考えられる。

古墳時代、佐土原では、横穴墓からなる佐土原村古墳が丘陵斜面を利用して作られるほか、東側の傾斜面上に立地する天神地区遺跡（宮ヶ迫遺跡）は、平成21・22年度に発掘調査され、土器焼成土坑、溝、竪穴建物・掘立柱建物等を伴う大規模集落であることを確認した。

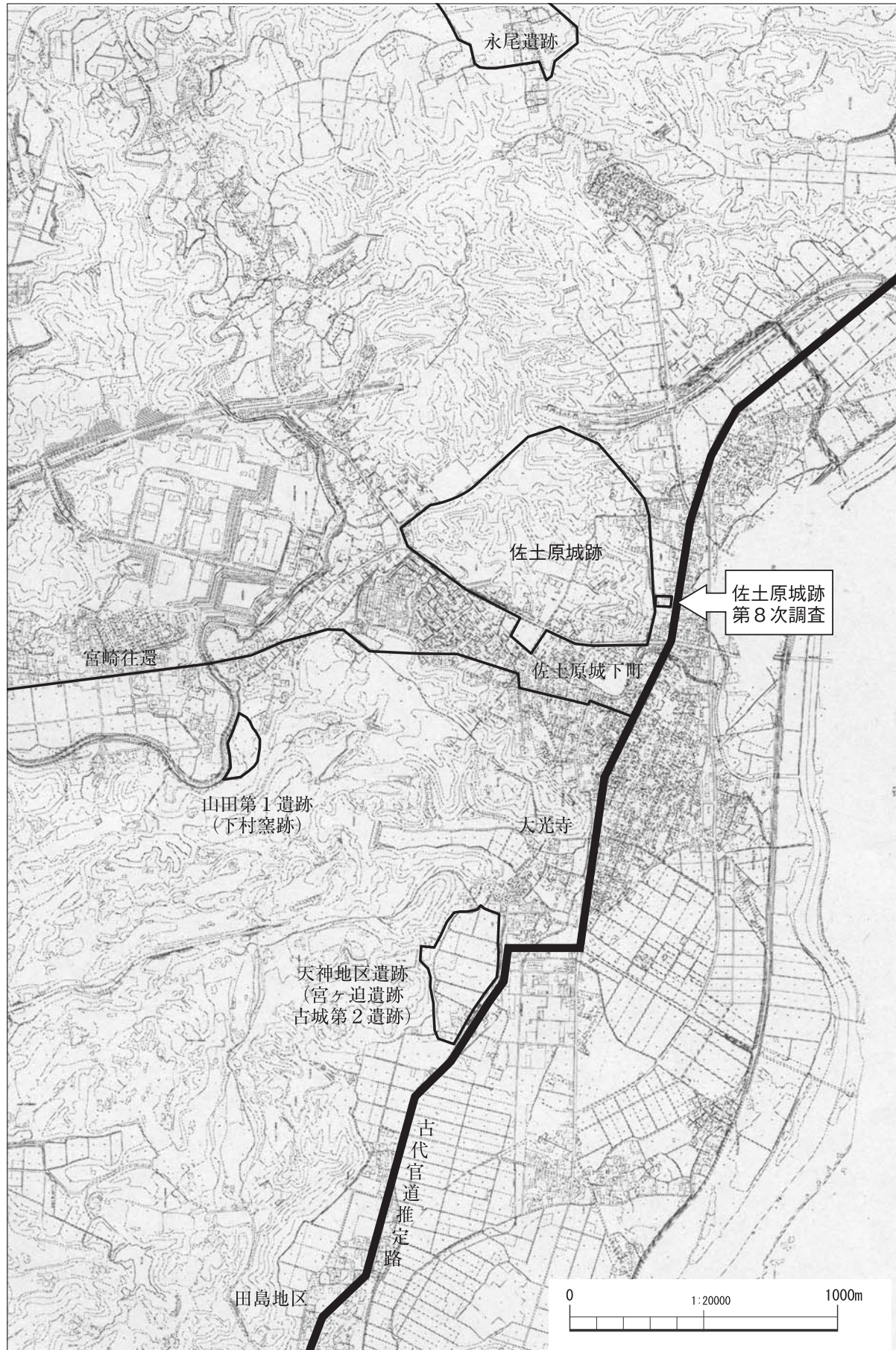
古代（奈良・平安時代）は、日向国府と宮崎平野をつなぐ古代官道が佐土原城北部に通っていたと推定されるほか、佐土原城の南にある丘陵に造営された下村窯跡では、日向国分寺で使用されたと考えられる古代の瓦が製作された。古代の遺物は前述の天神地区遺跡（古城第2遺跡）でも大量に出土しており、古代の瓦や円面硯など、官衛もしくは寺院関係の施設が存在した可能性が考えられる。なお、平安時代末期に開墾された田島庄は、佐土原城より東側の平野部～微高地を開墾したと推定される。

鎌倉時代、日向地頭に任命された工藤氏（後の伊東氏）の支族は、日向下向後に田島庄を支配し、やがて田島氏を名乗り勢力を拡大した。佐土原城は、南北朝期に都於郡に下向した伊東氏との抗争の中、田島氏が築城したと伝えられる。やがて田島氏を滅ぼした伊東氏は、佐土原城を、本拠である都於郡城と並ぶ重要拠点と位置づけた。

天文5（1536）年、家督を継いだ伊東祐清は、佐土原城に入城し義祐と名を改める。義祐は、佐土原城に留まりながら、敵対する島津氏の支配する飢肥へ度々侵攻、ついにこれを支配する。しかし義祐の権勢は、元龜3（1573）年における木崎原合戦の大敗以後は急速に弱まり、家臣の造反や島津氏の侵攻の末、天正5（1577）年、大友氏を頼って豊後へ落ちのびる。

代わって佐土原城に入城したのは島津氏当主の弟島津家久であり、補佐役の宮崎城主上井覚兼と共に日向支配を固めた。それと共に、天正5（1577）年、耳川の戦いで大友氏を、天正12（1584）年、沖田畷の戦いで竜造寺氏を退け、北部九州へ本格的な侵攻を開始する。しかし、天正15（1587）年の豊臣秀吉軍の到着後は劣勢となり、家久は降伏。直後に亡くなった。家督を継いだ豊久は、九州仕置により佐土原城を始めとした宮崎平野北部を所領とし、朝鮮出兵や庄内の乱などを歴戦の後、慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いで戦死した。

主人不在となった佐土原城は徳川氏領として旗本庄田安信が治めた後、慶長8（1603）年、垂水を支配していた島津以久が入城、初代佐土原藩主となる。二代藩主の忠興は、慶長16



第1図 周辺地形図 (S=1/20,000)



第2図 調査区位置図 (S=1/4,000)

第4節 調査の概要

(1611)年に櫓扉門や天守の築城に着手するなど佐土原城を補修した。その後寛永2(1625)年には本丸の屋敷を解体し山城の麓に居館を移築。藩政に関わる建物も併設した。城下は、武家屋敷や町人屋敷からなる城下町が形成され、その地割は現代にも残されている。

佐土原藩を治めた島津氏は、改易・減封を受けることなく明治維新を迎えた。戊辰戦争の戦功による加録後、藩は広瀬への転城を開始する。広瀬城の築城は、一年半後に発令された廃藩置県により中止となるが、既に武士の多くは広瀬へ転居したため、佐土原城下の武家屋敷の多くは耕作地となった。

第3節 調査に至る経緯

平成23年8月18日、九州電力株式会社より、宮崎市佐土原町上田島に所在する変電所を增強するための、文化財の有無について照会があった。文化財課は、開発策定区域が周知の埋蔵文化財包蔵地「佐土原城跡」に隣接することから、試掘調査が必要と回答した。その上で平成24年7月19日、8月30日に試掘調査を実施したところ、工区内から柱穴等の遺構が確認された。この結果を受けて文化財課は新規発見の埋蔵文化財包蔵地「佐土原城下遺跡」として登録すると共に九州電力株式会社と協議し、工事により埋蔵文化財への影響が免れない部分について本調査を実施することとなった。事業にかかる契約は平成24年11月5日に締結した。

第4節 調査の概要

発掘調査は、平成24年11月26日より着手した。調査区の設定に当たっては、建物部分及びその外側1mを範囲とし、バックホウにより検出面の上位に堆積する層を除去した。検出面付近は、灰褐色の粘質土が堆積していたために判別は容易ではなかったが、地表面下80cmより、硬化した灰褐色の粘質土へ移行すると共に、柱穴等の遺構を検出した。そのため、この分層ラインを手がかりに検出面を揃えた後、人力で遺構の検出作業を行い、確認した遺構は遺物を確認しながら掘削した。調査区は、雨水の流入ばかりでなく、壁面や床面からの湧き水も顕著であり、掘削作業は常に排水作業と併行しながら行った。本調査は、平成25年2月15日に終了した。調査面積は400㎡である。

出土した遺物はきよたけ歴史館に運搬し、平成25年度に九州電力株式会社の協力の下室内整理作業を実施、水洗い作業からナンバリング・接合・実測・トレースを行った。この中で、作業が困難な染付けをはじめとした陶磁器の実測・トレースを委託した。

なお、今回の調査で出土した埋蔵文化財は、佐土原城内の佐土原藩と強い関連を窺わせるものが多かった。調査区は、現時点では試掘時に新規発見された周知の埋蔵文化財包蔵地「佐土原城下遺跡」の域内という扱いだいが、調査地は現在宮崎市が実施している埋蔵文化財の分布調査により、隣接する「佐土原城跡」に含める方針であることから、今回の調査成果は「佐土原城跡」として報告する。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 基本層序

調査区内は検出面まで、およそ80cmの土層堆積が見られた。その詳細は以下のとおりである。以下、層毎に説明を行う。

I層：Hue10YR黒褐3/1

耕作土層。シルト状の粒子である。堆積の厚さは15cmほどであり、部分的に灰褐色の粘質土がブロック単位で混入する。現代の生活廃棄物が多く混入していた。

II層：Hue5Y浅黄7/4

砂質土層。硬くしまった造成土である。堆積の厚さは25cmである。部分的に指先大のブロックが含まれる。宮崎層群に含まれる砂質土であり、他の地点から搬入されたと考えられる。

III層：Hue2.5Y灰黄7/2

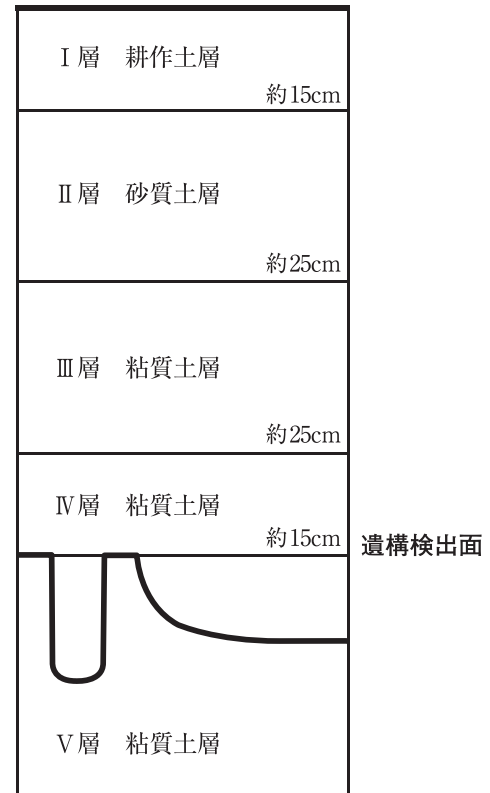
粘質土層。堆積の厚さは約25cmである。非常に硬くしまっており、時折鉄分による斑紋が認められる。混入物等は認められない。

IV層：Hue2.5Y黄灰6/2

粘質土層。硬くしまっている。堆積の厚さは15cmほどである。色調は一定せず、特に調査区中央部では濃淡が激しい。層中には、近世の陶磁器類の小片や焼土の塊、大小の炭の破片が多く混入する。

V層：Hue2.5Y黄灰6/1

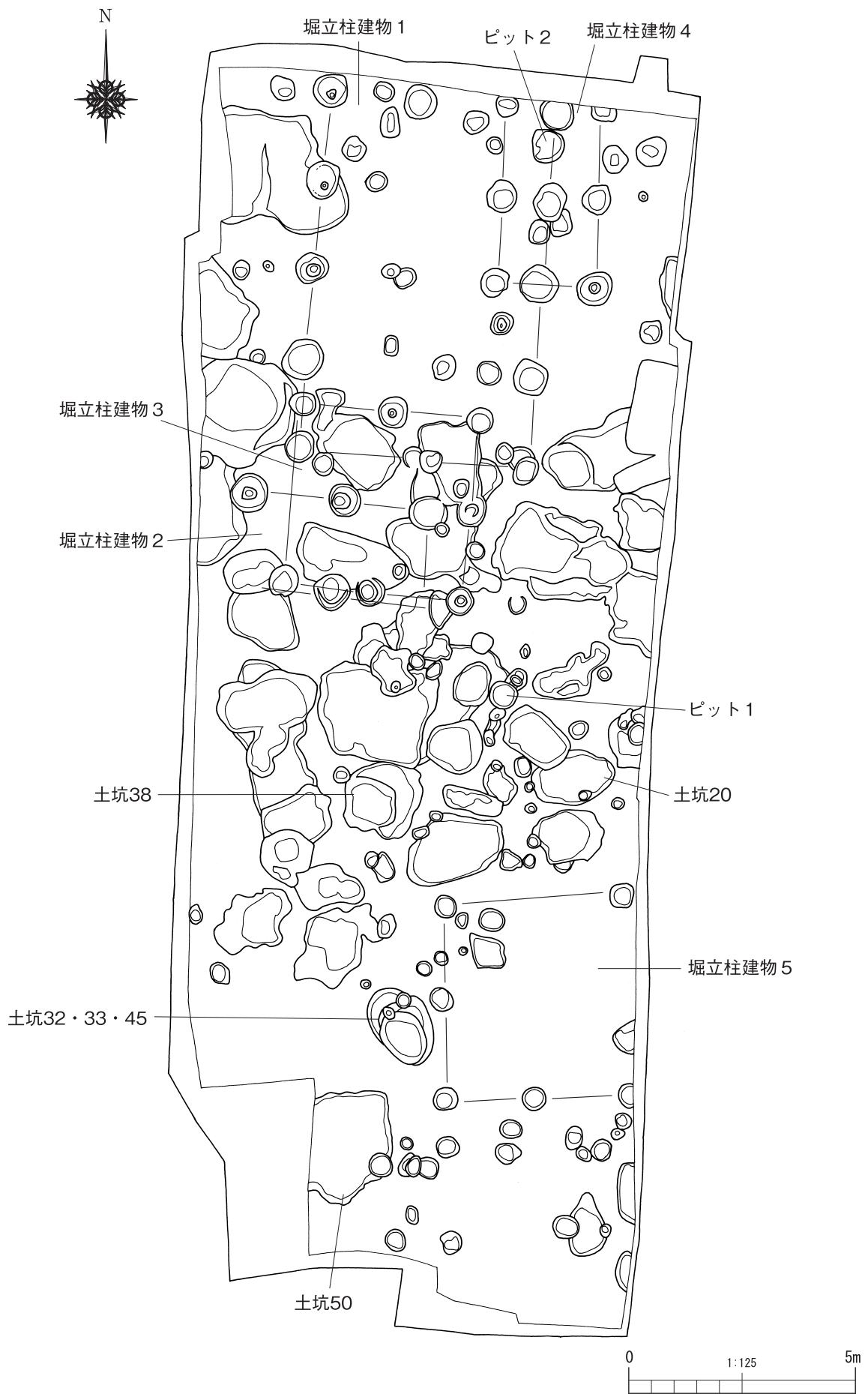
この層の上面が遺構検出面である。硬くしまっているが、水を多く含むと泥となって軟化する。色調は場所により黄褐色や灰褐色を呈するなど一定しない。攪乱部分を観察すると、下位は1m以上もこの層の堆積が続いていることから、堆積自体は安定している。



第3図 土層柱状模式図

これら層の堆積と、周辺の地形・土地利用を併せて考えると、調査区内は以下の経緯で堆積したと推定される。

- ①中世以前：宮崎層群中の粘質土が流下し堆積する（V層）
- ②近世：堆積中に生活地として遺物が残される。途中ごみ穴としてV層と混じりながら掘り返される（IV層）
- ③近代：屋敷地の廃棄後に水田として利用され、床土が形成される（III層）
- ④現代：変電所の工事に伴い調査区部分に客土として砂質土が持ち込まれる（II層）
- ⑤現代：工事後に畑地として利用される（I層）



第4図 調査区遺構分布図 (S=1/125)

第2節 検出遺構

掘立柱建物、土坑、ピットが検出された。いずれも近世の遺構である。

掘立柱建物

柱穴は調査区の北側において、規則的な柱穴の配置を認識するに至った。また、調査区の中央やや北側にも、土坑と切り合いながら柱穴の並びを2棟分確認した。掘立柱建物の詳細は表1のとおりである。

掘立柱建物1

北側より検出した。確認した柱穴は11基であり、北側へ更に延びると考えられる。柱穴は径70cm前後と大ぶりだが、東辺と西辺の中間に位置する柱穴6は径50cm未満であり、他の柱穴に比べて小ぶりである。柱穴の深さは100cmから20cmまで統一性がないが、東西方向に対応する柱穴2と柱穴8と南辺の3基は深さ約20cm未満と浅いなど、深さには規則性が認められる。西辺の柱穴1～3では柱を据置いたと見られる径10～15cmの凹みが認められる。ただし柱痕は認められなかった。

掘立柱建物2

中央西側より検出した。確認した柱穴は6基であり、西側へ更に延びる可能性がある。柱穴は総じて径70cm前後と大ぶりである。柱穴の深さは60cmある柱穴5以外はいずれも20cm以下と浅い。柱穴は土坑と切り合っていたために確認が困難であり、柱穴4・6は一部しか残されていない。また、柱穴1・2からは柱を据置いたと見られる径10～15cmの凹みが見られた。ただし埋土中に柱痕は認められなかった。

掘立柱建物3

中央西側より検出した。確認した柱穴は7基である。柱穴は径50～60cm前後であり、深さは、70cmある柱穴1以外はいずれも20cm以下である。柱穴は土坑と切り合っていたため確認が困難であり、南辺の中間の柱穴は解体後土坑の掘削により消失した可能性がある。また、柱穴2・4・5・6からは柱を据置いたと見られる径10～15cmの凹みが認められた。ただし柱痕は認められなかった。

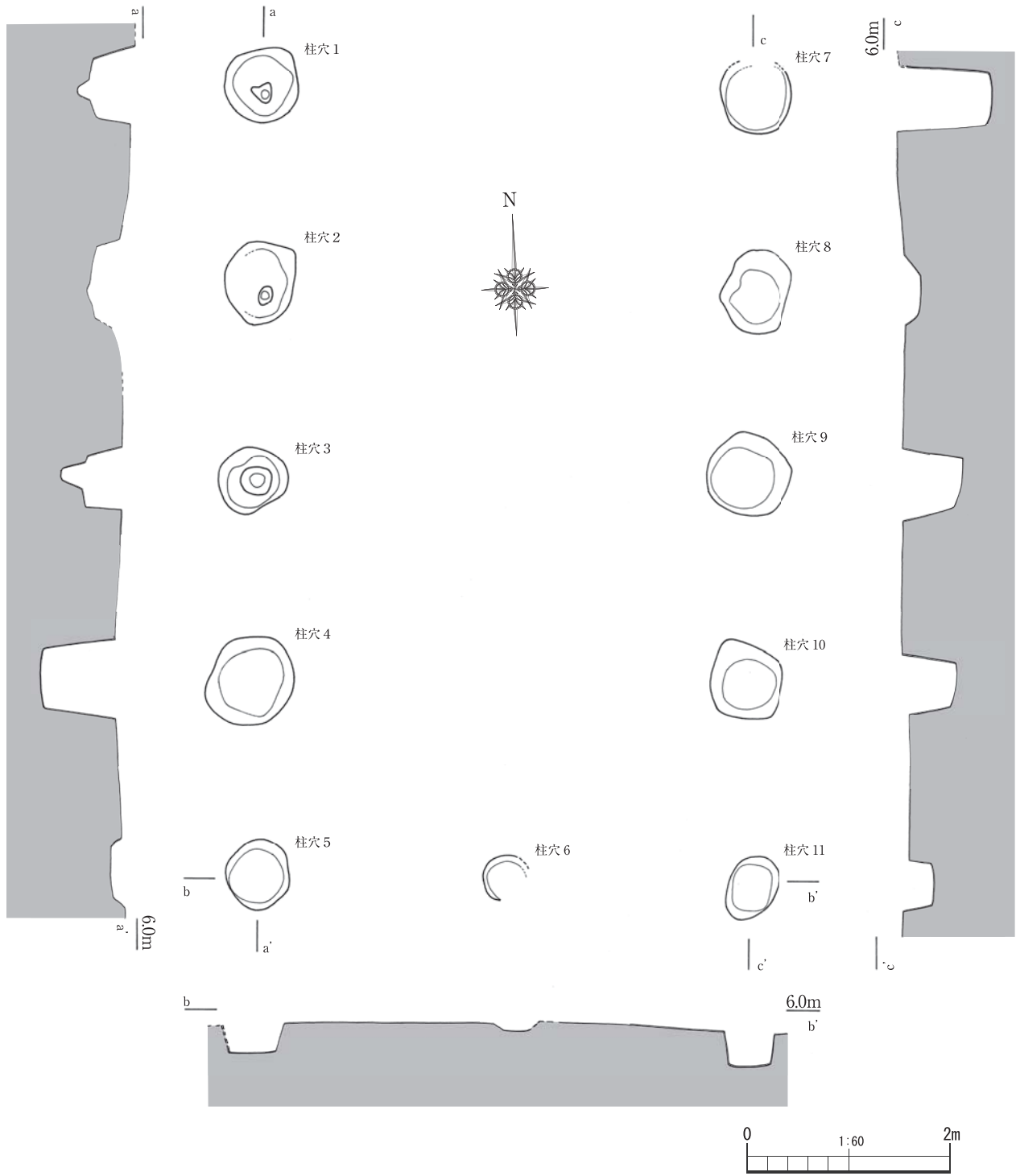
掘立柱建物4

北側より検出した。確認した柱穴は6基であり、北側へ更に延びると考えられる。柱穴は径70cm、深さはいずれも40cm程度であるが、柱穴3のみ深さ15cmと浅くなっており、柱を据置いたと見られる径10cmの凹みが認められた。ただし柱痕は認められなかった。

掘立柱建物5

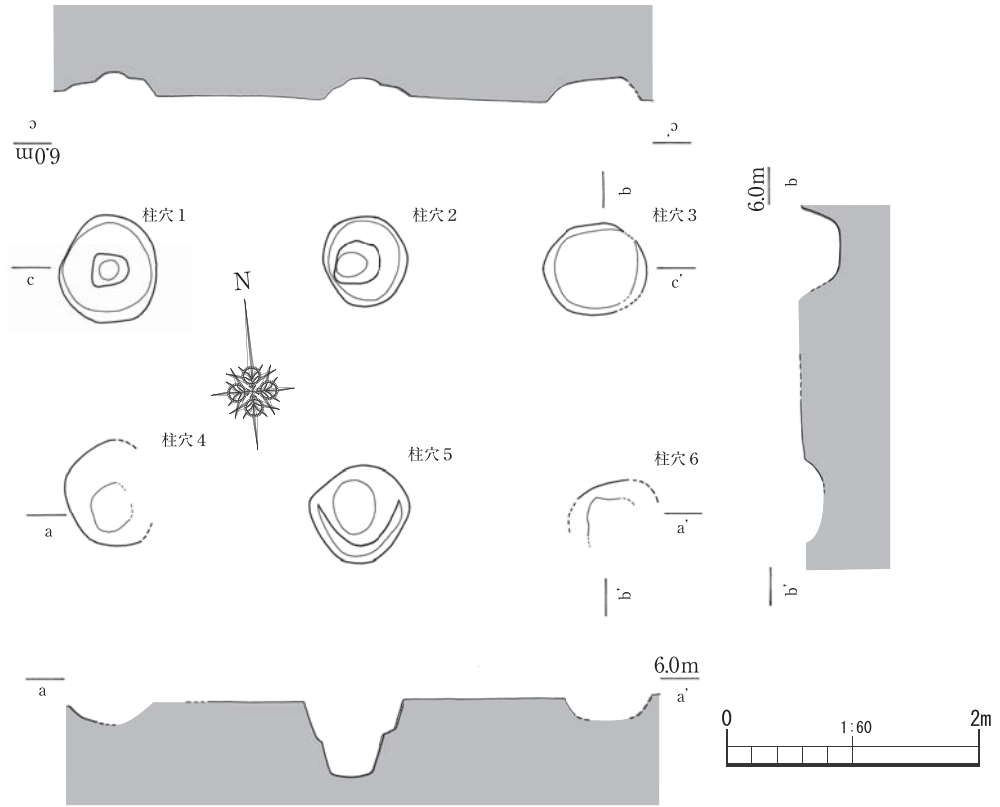
南側の東部より検出した。確認した柱穴は5基であり、東側へ更に延びると考えられる。柱穴は径50cm程度、深さは15cm程度であった。なお、北辺の中間に柱穴にあたる柱穴が欠落しているが、検出地点周辺は調査時常に湧き水が滞留する場所にあたるため、残存状況の悪さが関係した可能性が高い。

掘立柱建物 1

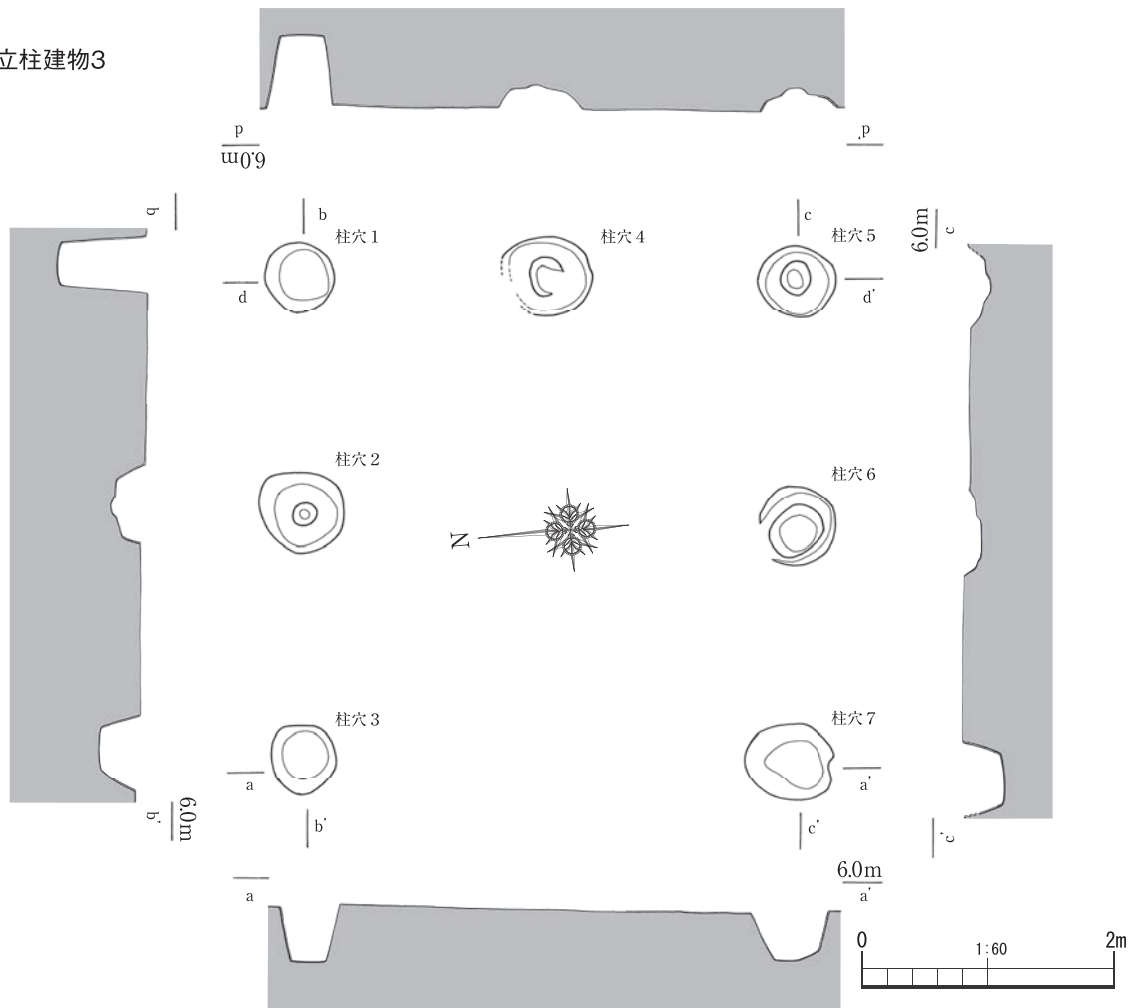


第5図 掘立柱建物実測図 1 (S=1/60)

堀立柱建物2

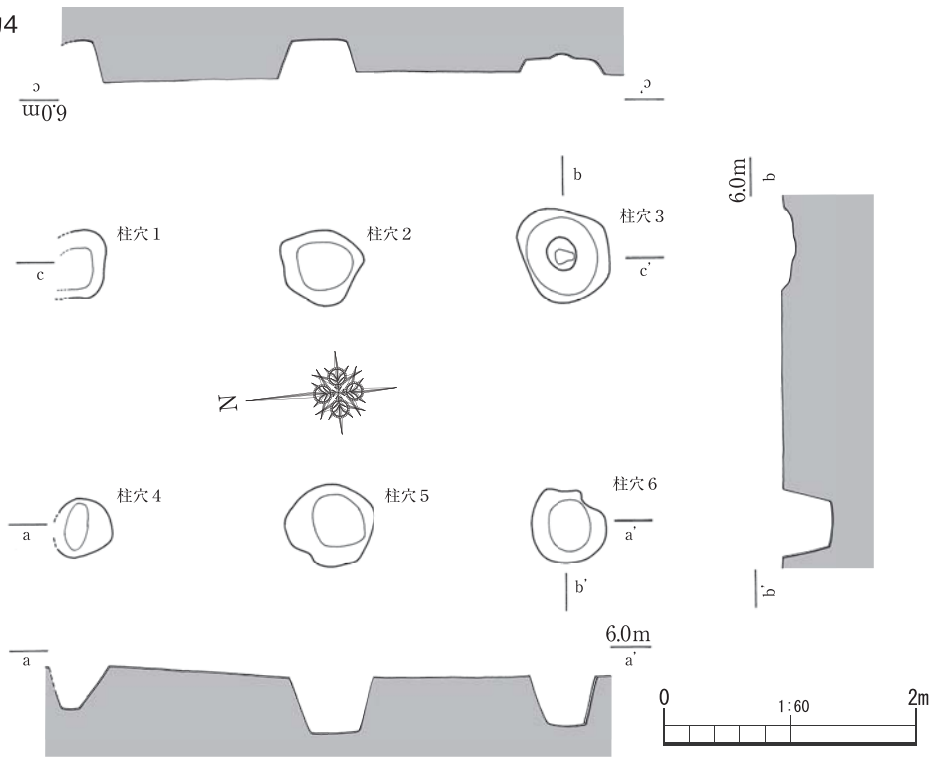


堀立柱建物3

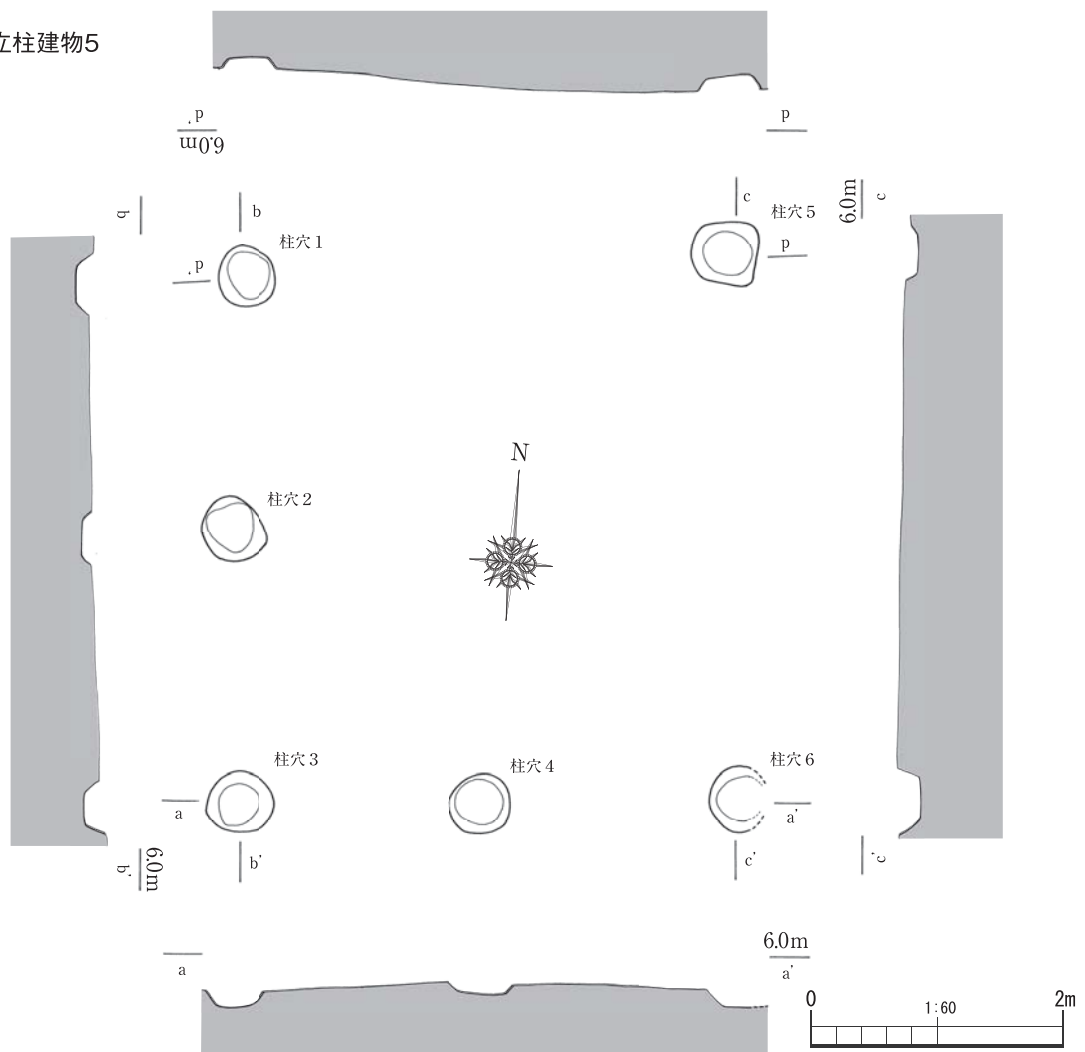


第6図 堀立柱建物実測図2 (S=1/60)

堀立柱建物4



堀立柱建物5



第7図 堀立柱建物実測図3 (S=1/60)

土坑

50基を検出した。平面形は円形や方形、不定形と様々だが、1～3mの浅い皿状を呈し、深さは20cm以下と言う点ではいずれも共通している。土坑は調査区中央部で激しく切り合っており、輪郭を認識し難いものも見られた。これは、掘削と埋没を繰り返したためと考えられる。ここでは、特徴的な土坑のみ掲載する。

土坑20

調査区中央東側で検出した。長軸1.7m、短軸1.3mの楕円形を呈する。深さは約20cmである。遺物は陶磁器が出土した。周辺は同様の楕円形の土坑がいくつも分布するが、遺物の出土は希薄である。

土坑38

調査区中央よりやや南よりで検出した。土坑は一辺1mのやや歪な方形と、1.5mのテラスがある。土層図を見ると方形部分が深く、その上でテラス部が掘削・埋没したと考えられる。遺物はこのうち方形の落込部分に集中して出土した。薩摩焼が比較的多い点の特徴である。

土坑32・33・45

調査区南側で検出した。土坑は32が一辺1mの隅丸方形、45が90cm×120cmの楕円形、33が一辺1mの歪な楕円形を呈する。このほか、遺構中には径20cm、径10cmのピット2基も含まれている。これらも含め、掘り込まれた順番は32→45→33→ピット2基になる。固定された場所で繰り返し掘削が行われたと考えられるが、遺物の出土はなかった。

土坑50

調査区の南端から検出された。南北に2.7m、東西に1.3mあるが、調査区境界にかかっているため、東西方向には更に広がると考えられる。平面形は不定形である。埋土からは多くの遺物が出土したが、いずれも18世紀後半以降であり、年代的にまとまりを見ることができる。

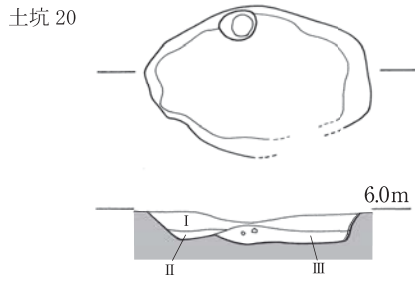
ピット

規則的配列を伴わない小穴は、調査区内で81基検出された。このうちピット1・2は径30cm以内、深さ20cm程度と小ぶりであるが、底面付近よりピット1からは108、ピット2から107が出土した。他に遺物を持たずに出土したこと、出土遺物が土人形であることから、埋納したと考えられる。

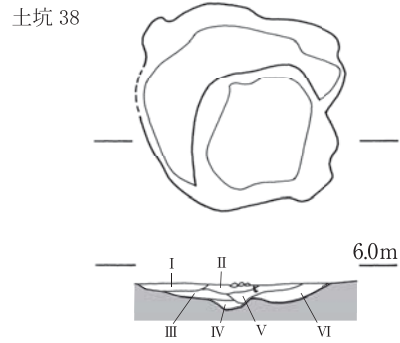
第3節 出土遺物

調査区内からは多くの遺物が出土した。種類は磁器、陶器、瓦を主体とするが、徳利や紅皿、髷水入れなど、生活雑器も多く出土した。他にも、砥石や火打石などの石器、留め金具の部品である金属器、銅銭、数珠玉のガラス、天神人形をはじめとした土師質の土人形など多岐にわたる。これら遺物の詳細は観察表に参照したとおりである。なお、中世に属する土師器の小皿も出土しており、当地における土地利用が中世に遡る可能性を示している。

第3節 出土遺物

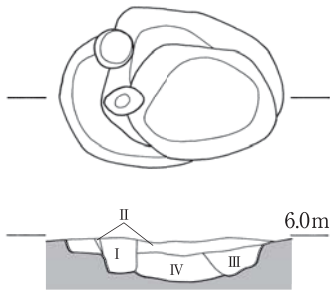


- I層 2.5Y黄褐 5/3
やや砂質の混じる粘質土層。マーブル状に混入する。硬くしまっている。層中に白色の砂粒を少量含む。
- II層 2.5Y灰黄 6/2
砂質の層。I層中の白色の砂粒を主体的に構成。
- III層 2.5Y暗灰黄 5/2
I層のうち粘質部分が卓越した層。白色砂粒なし。



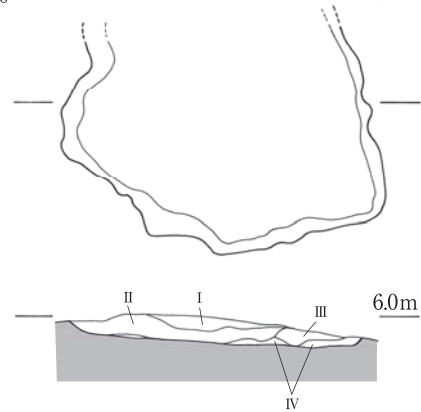
- I層 10Y R 褐灰 5/1
粘質土。層中には、灰黄色の小ブロックを微量含む。
- II層 2.5Y黄灰 6/1
浅黄色の粘質土ブロックを多く含むほか、層中には礫を多く含んでいた。
- III層 2.5Y暗灰黄 5/2
粘質土。ブロックは混入しない。遺物はこの層より多量に出土した。
- IV層 2.5Y黄灰 5/1
灰白色や明黄褐色のブロックを多く含む。層は全体的に斑紋を形成する。
- V層 2.5Y黄灰 5/1
粘質土のブロックの間を粘質土が埋める。
- VI層 2.5Y黄灰 6/1
層は一様に堆積しており、ブロックの混入はない。

土坑 32・34・45



- I層 5Y R 灰白
砂質がかった層。硬くしまっている。部分的に黄灰色の黒ずみがグラデーション状に見られる。
- II層 10Y R 5/2 灰黄褐
砂質。部分的に灰白色のブロックが混入する。層中には部分的に赤味がかかる。鉄分の沈着。
- III層 10Y R 褐灰 6/1
粘質土。部分的に暗灰色のブロックを含む。炭を多く含むことからこの層も炭による黒ずみ。
- IV層 10Y R にぶい黄褐 5/3
粘質土。層中に地山の砂層が混入する。このほか、黄灰色の粘質土のブロックを多く含む。

土坑 50



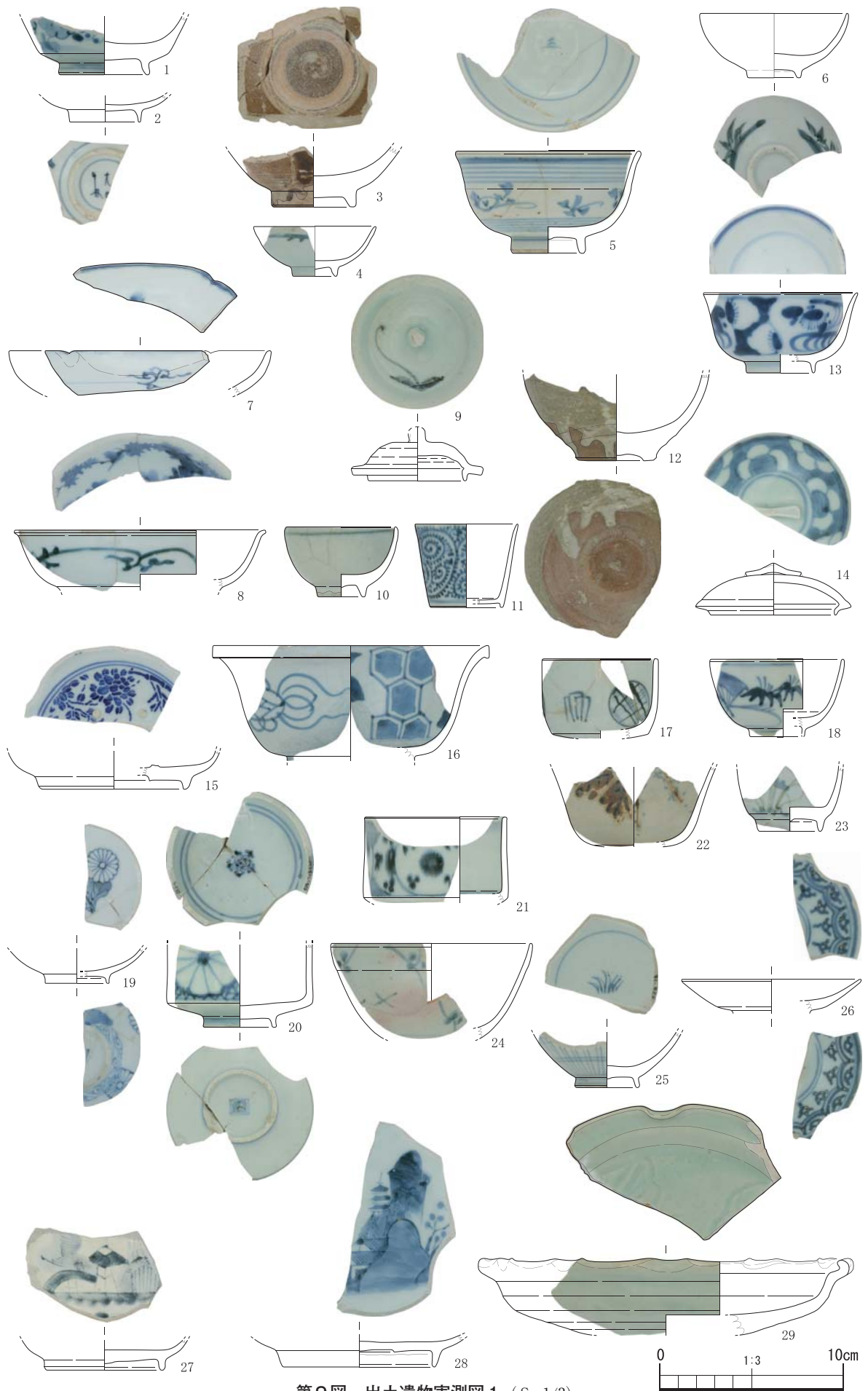
- I層 10Y R 4/2 灰黄褐
硬い粘質土。層中に浅黄色のブロックを少量含む。鉄錆らしき赤い斑紋が層全体を覆う。
- II層 10Y R 5/3 にぶい黄褐
硬い粘質土。層中に浅黄のブロックを少量含むが、同化して斑紋状に混入する。
- III層 10Y R 5/2 灰黄褐
軟質の粘質土層。黄褐色のブロックを中量含む。
- IV層 5Y R 浅黄 7/3
ブロックで構成される。ブロックは3cm大。輪郭は明らかで隙間に主体層が混入する。



第8図 土坑実測図 (S=1/30)

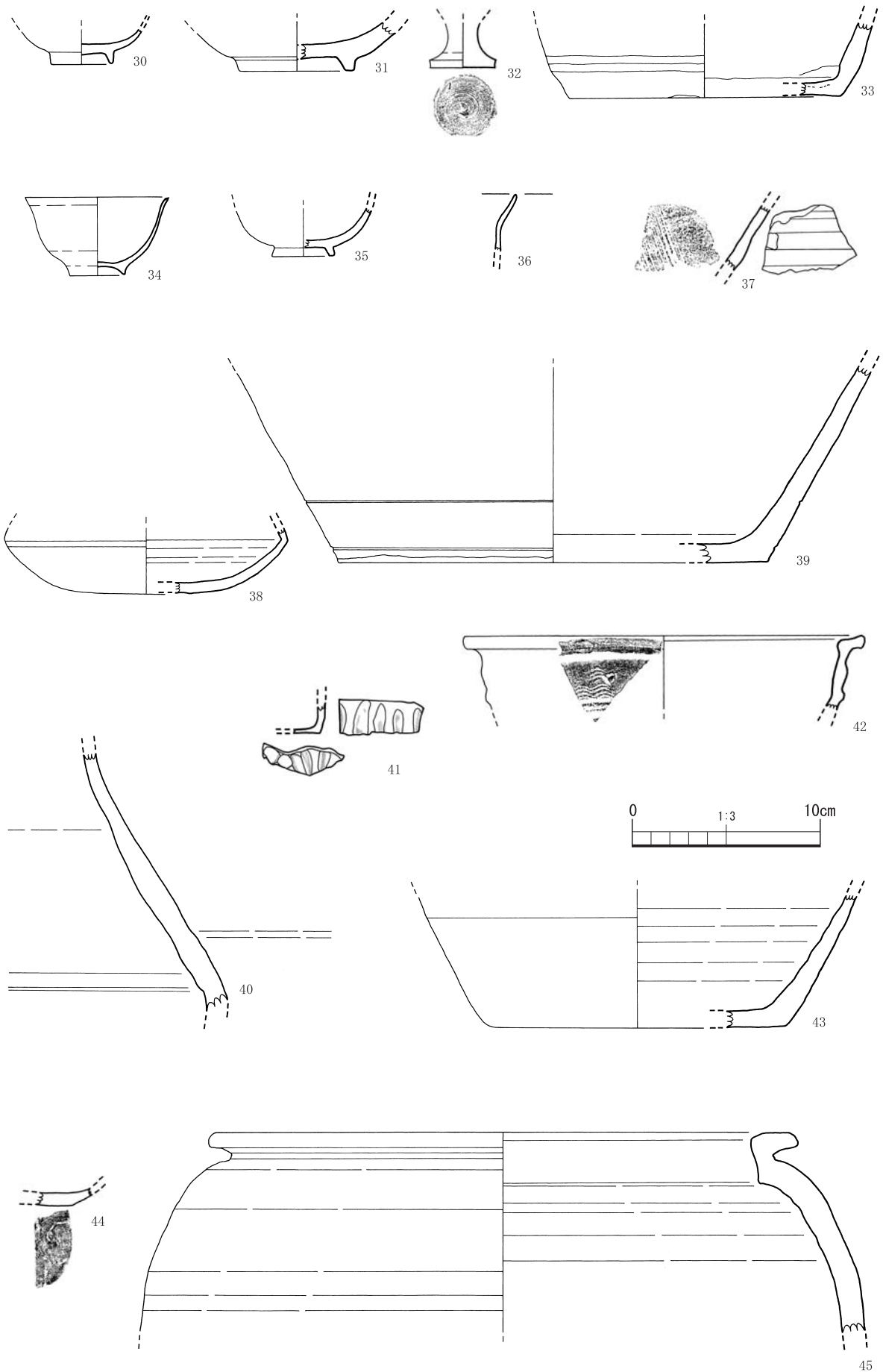
第1表 掘立柱建物観察表

遺構番号	図面掲載頁	図面番号	柱穴基数	桁行×梁行(m)	桁行の間隔(m)	梁行の間隔(m)	平面形態(m)	身舎面積(m ²)	主軸方向	備考
1	8	5	11	4 + a × 2	2	2.6	8.4 + a × 5.2	43.68 + a	南北	
2	9	6	6	1 × 2 + a	2	2	2.6 × 4.7 + a	12.22 + a	東西	
3	9	6	7	2 × 2	2	2	4.4 × 4.5	19.8	南北	
4	10	7	6	2 + a × 1	1.9	2.1	4.6 + a × 2.7	12.42 + a	東西	
5	10	7	5	2 × 2 + a	1.9	2.1	4.7 × 4.3 + a	20.21 + a	南北	

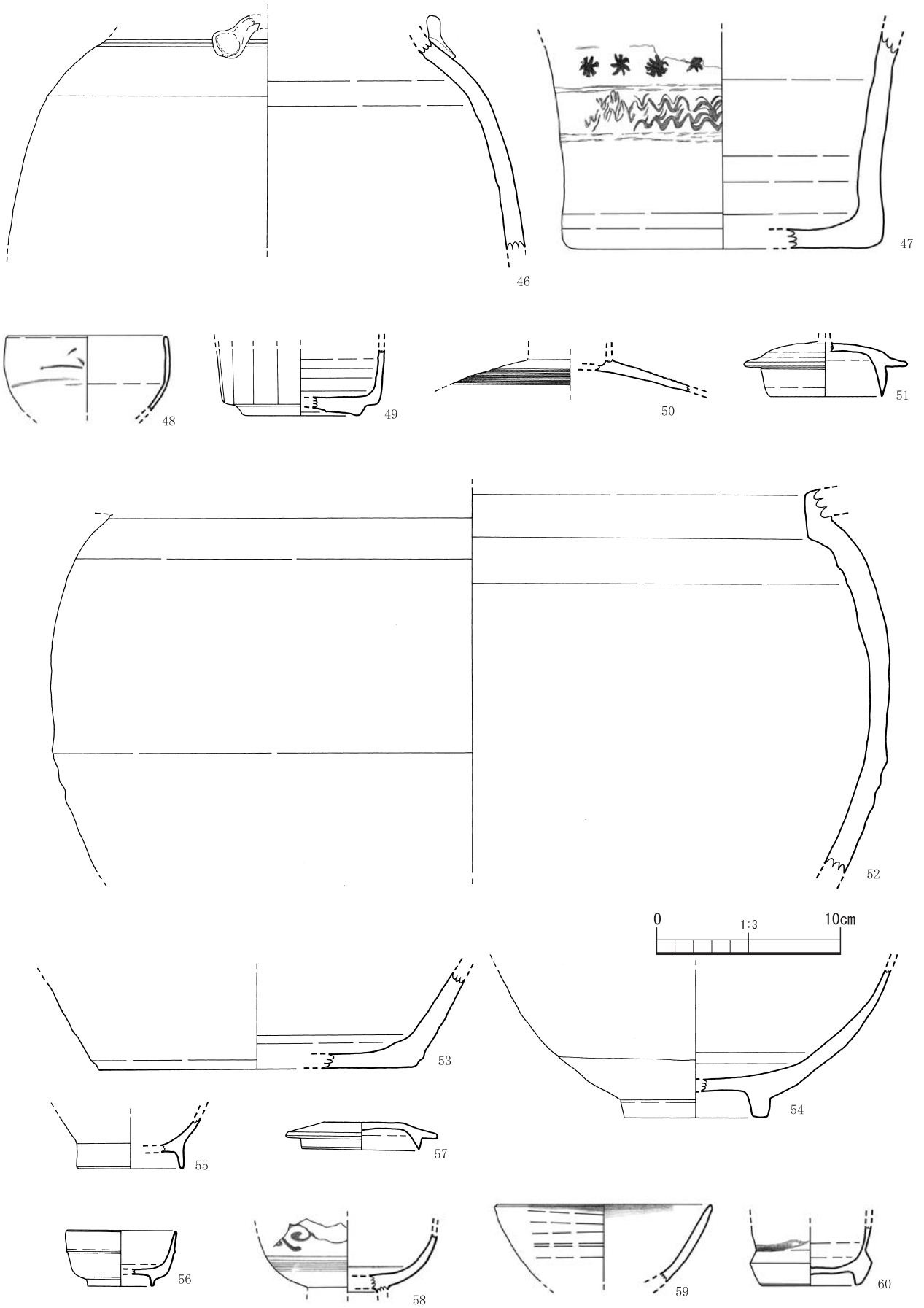


第9図 出土遺物実測図1 (S=1/3)

第3節 出土遺物

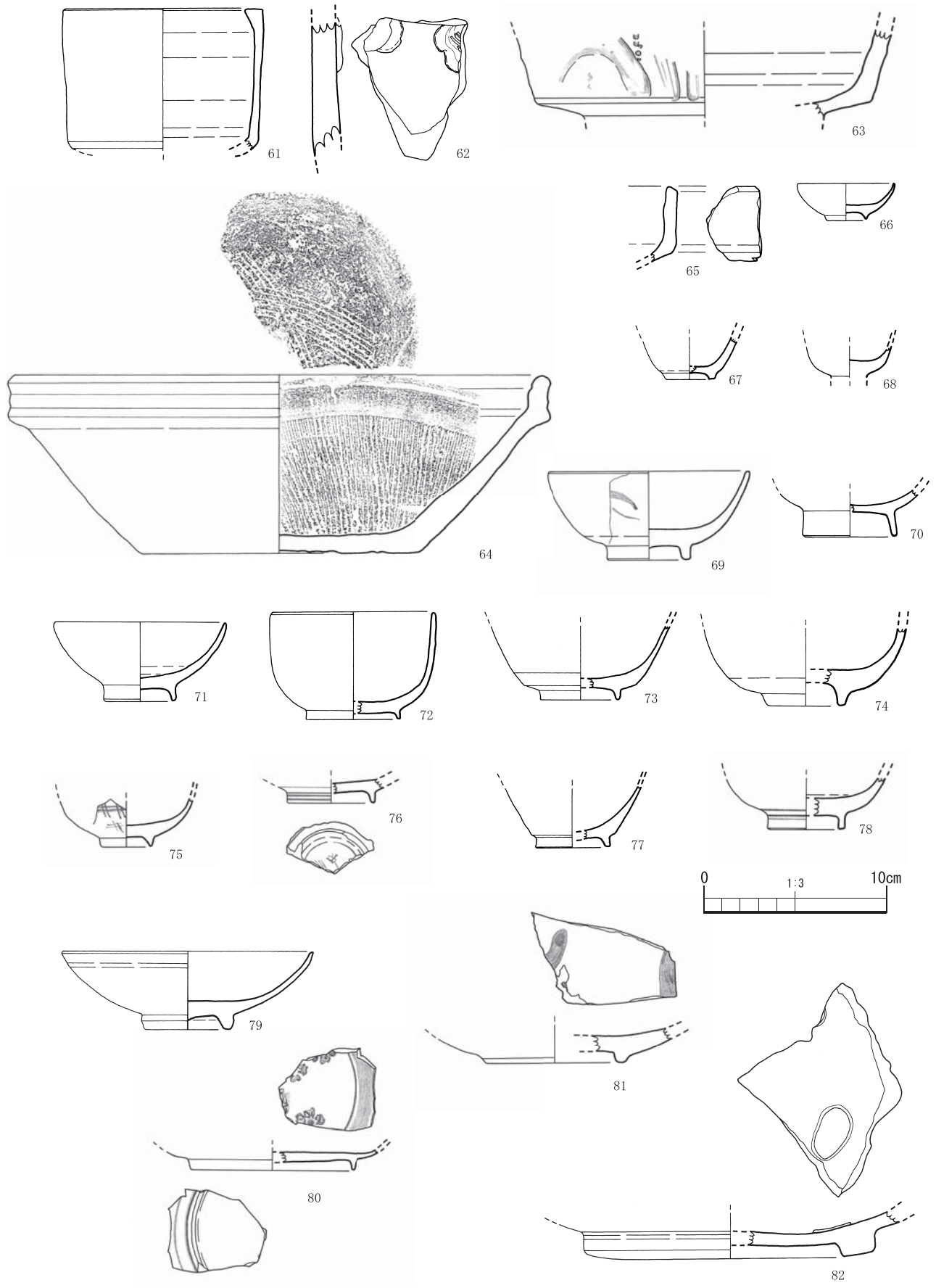


第10図 出土遺物実測図2 (S=1/3)

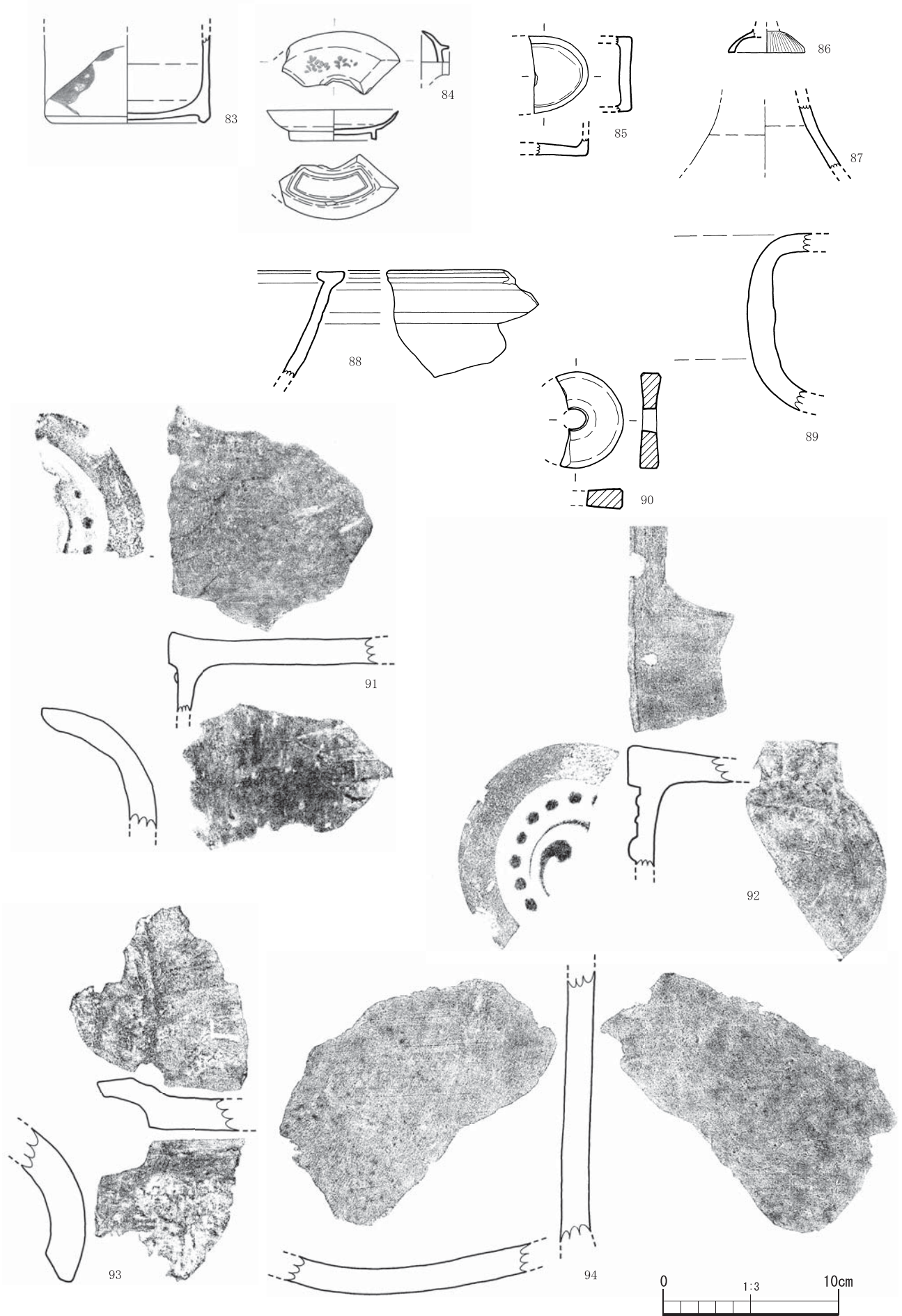


第11図 出土遺物実測図3 (S=1/3)

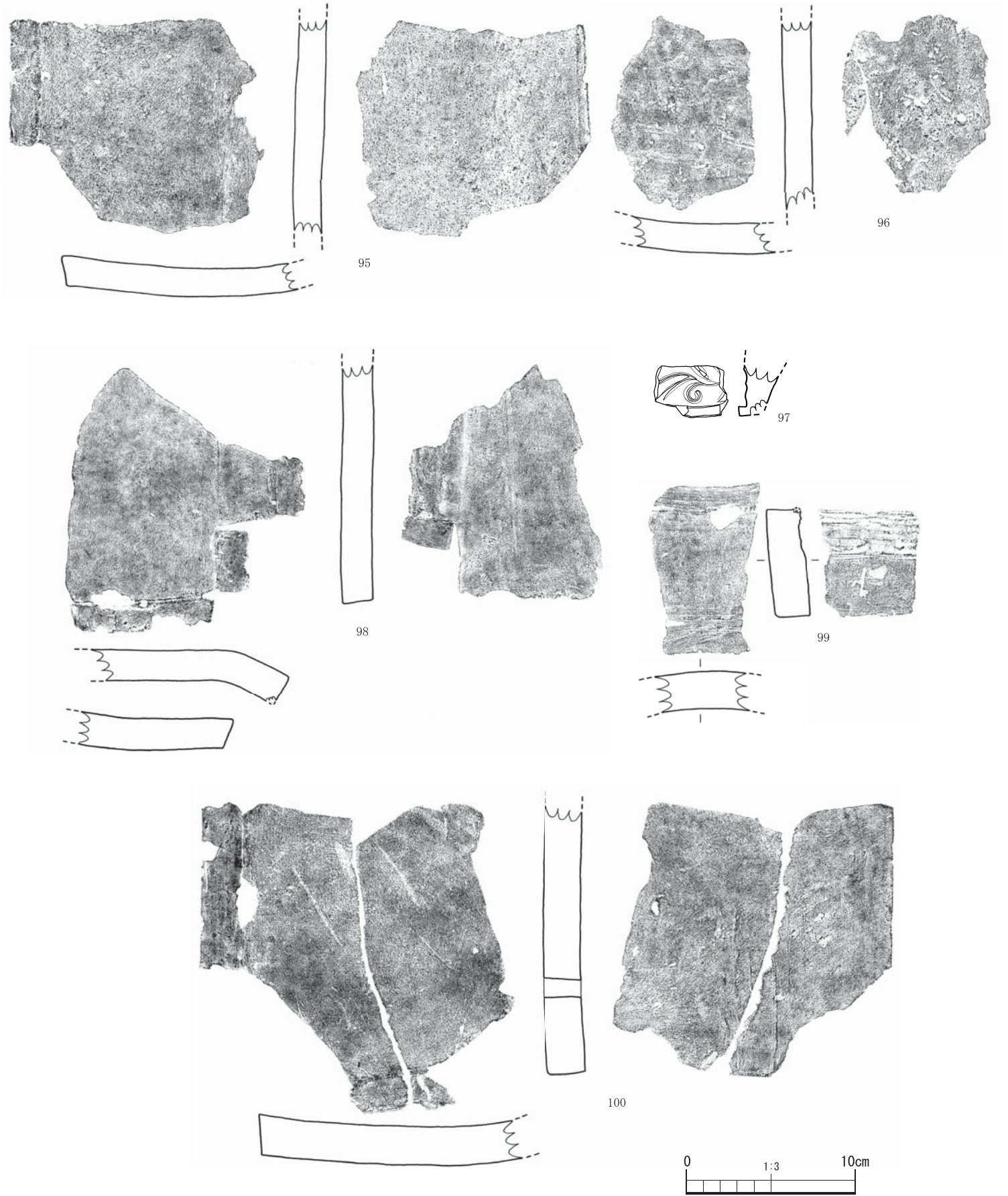
第3節 出土遺物



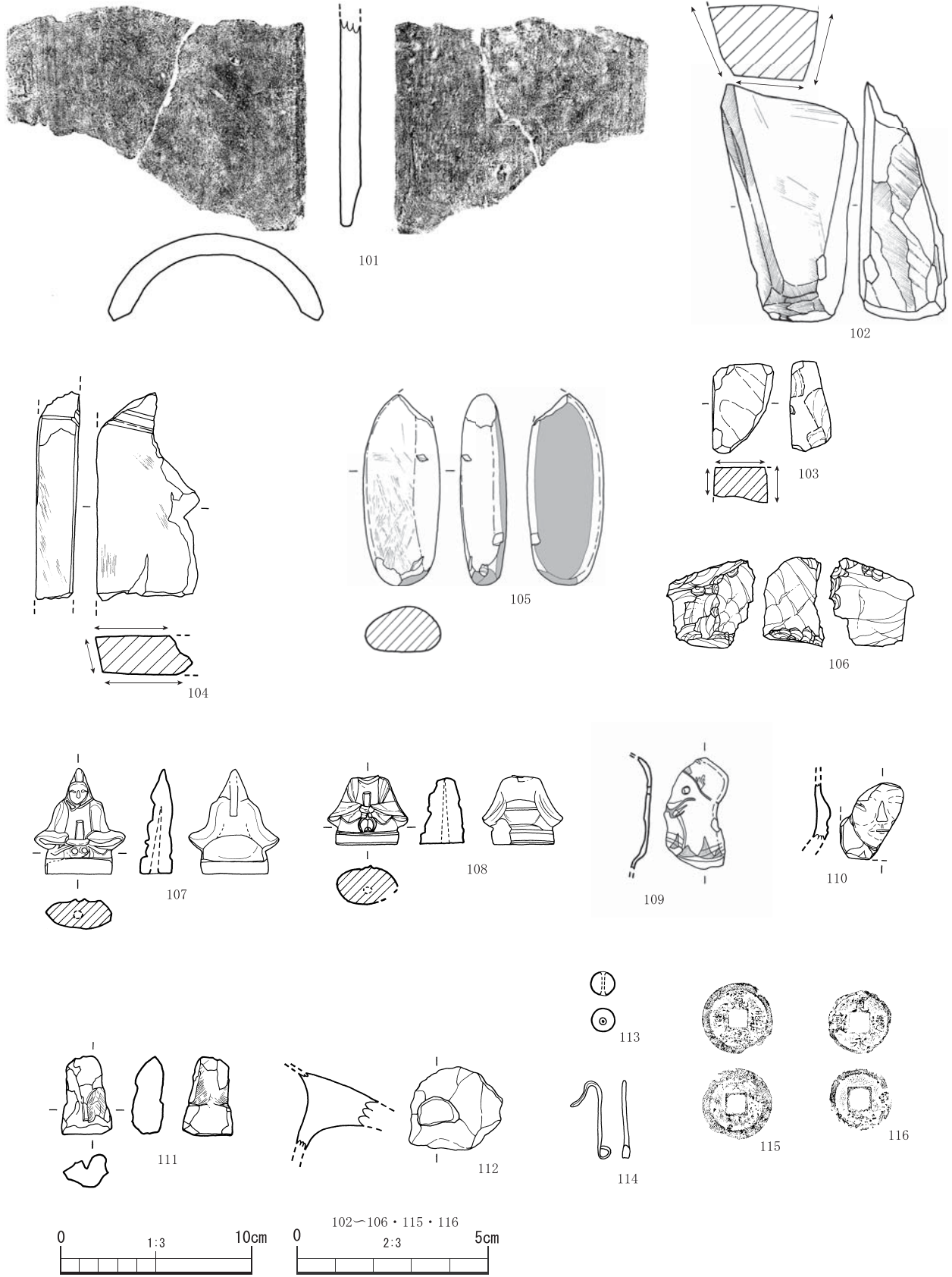
第12図 出土遺物実測図4 (S=1/3)



第13図 出土遺物実測図5 (S=1/3)



第14図 出土遺物実測図6 (S=1/3)



第15図 出土遺物実測図7 (S=1/3)

第3節 出土遺物

第2表 出土遺物観察表

No.	出土遺構	種別	器種	産地	年代	法量			その他
						口径	底径	器高	
1	SC1	染付磁器	朝顔形丸碗	肥前系	18c 後半	—	(4.7)	—	外面：2重の圏線
2		染付磁器	小杯	肥前系	17c 後半	—	3.7	—	高台内：「大明年製」
3	SC3	陶器	碗	薩摩（龍門寺）	17c 後半	(6.6)	2.5	2.7	
4	SC4	染付磁器	紅猪口	肥前系	19c 頃	—	—	—	外面：笹紋
5		染付磁器	端反碗	伊予（砥部）系？	19c 中葉	8.5	3.9	5.1	外面：多重圏紋蛇ノ目釉剥ぎ
6		染付磁器	紅猪口	肥前系	18c 後半	(7.6)	3.5	2.7	
7	SC15	染付磁器	輪花皿	肥前系	18c 前半頃	—	(13.7)	—	
8	SC20	染付磁器	皿	肥前系	18c 前半頃	—	4.7	(3.0)	内面：コンニャク印判の楓
9	SC26	染付磁器	壺の蓋	肥前系	17c 後半	(13.6)	—	—	
10	SC38	染付磁器	小杯	肥前（初期伊万里）	17c 中葉	6.0	(2.7)	3.7	
11		染付磁器	蕎麦猪口	肥前系	18c 後半	(5.2)	(3.4)	4.6	蛸唐草紋
12	SC47	陶器	碗	肥前系	16c 末～17c 前半	4.1	—	—	外面に1重の圏線、高台に2重の圏線
13	SC50	染付磁器	端反碗	瀬戸美濃系	19c	(7.8)	(6.6)	(4.4)	
14		染付磁器	蓋付鉢の蓋	肥前系	18～19c	—	(6.7)	(2.7)	熨斗形の鈕
15		染付磁器	輪花皿		19c 後半	(7.7)	—	—	内面に染付、五弁花文、2重の圏線
16		染付磁器	鉢	肥前系	19c	(6.2)	—	—	外面：宝紋崩 内面：亀甲紋
17	一括	染付磁器	湯呑碗	肥前系	19c	—	—	—	外面：丸紋 内面：1重の圏線
18		染付磁器	碗	肥前系	18c 後半～19c	(7.2)	(2.9)	4.2	源氏香文様？
19		染付磁器	碗	肥前系	18c 後半～19c	—	3.5	—	内外面は素描
20		染付磁器	筒形碗	肥前系	18c 後半	—	3.9	—	外面：氷裂紋に菊 内面：二重圏に渦福 見込み：五弁花
21		染付磁器	筒形碗	肥前系	18c 後半	7.6	—	—	
22		陶器	碗			—	—	—	鉄絵
23		染付磁器	小杯	肥前（初期伊万里）	17c 中葉	(3.3)	—	—	
24		染付磁器	丸碗	肥前系	18c 後半	(10.8)	—	—	
25		染付磁器	小カントン碗	肥前系	17c 後半～18c 前半	—	(3.3)	—	
26		染付磁器	端反碗	肥前系	19c	—	—	(9.7)	揺環紋
27	染付磁器	輪花皿	肥前系	19c	—	(6.3)	—	見込み：山水楼閣紋 焼成不良	
28	染付磁器	輪花皿	肥前系	19c	—	(8.2)	—	見込み：山水楼閣紋	
29	青磁	輪花皿	肥前（波佐見）	17c 後半	—	(20.2)	—	見込み：草花紋 片切彫	
30	SC1	磁器	小形碗	肥前系	18c 後半～19c	—	(3.4)	—	
31		陶器	皿or鉢	肥前系	17c	—	3.4	—	
32		陶器	仏飯具	肥前系	19c？	—	(3.9)	—	
33		陶器	甕	肥前か？	17c 初頭？	—	(14.4)	—	底面：貝目
34	SC4	白磁	小碗	中国（徳化窯）	清朝期	7.6	3.0	4.1	貼付突帯
35		磁器	丸碗	関西系	18c 後半～19c	—	(3.4)	—	自然釉
36		陶器				—	—	—	
37	陶器	搦鉢	肥前系	17c 後半	—	—	—		
38	陶器	土瓶	薩摩（苗代川）	18c 後半～19c	—	(4.6)	—		
39	陶器	甕	肥前系	18c～19c	—	(22.5)	—	二次被熱痕	
40	陶器	大甕		19c 以降	—	—	—	緑色の釉	
41		陶器	水滴	瀬戸美濃系か？	18c	—	—	—	
42	SC10	二彩唐津	鉢	肥前系	17c 後半	(23.0)	—	—	3つ脚付き、注ぎ口の穴3つ
43		陶器				—	(15.6)	—	脚付き
44	SC19	土師器	小皿		中世	—	—	—	自然釉
45	SC35	陶器	甕			(30.4)	—	—	重ね焼痕
46		陶器				—	—	—	
47	SC36					—	—	—	
48	SC38	染付磁器	碗	関西系	18c 後半～19c	(8.4)	—	—	
49		青磁	香炉・火入れ	肥前系	18c～19c	—	(6.3)	—	底部：鉄錆塗
50		陶器	鉢の蓋		18c 以降	—	—	—	注ぎ口の穴1つ
51		陶器	土瓶の蓋	薩摩（苗代川）	19c	—	(6.6)	—	
52		陶器				—	—	—	
53		陶器	鉢	薩摩（苗代川）	18c 後半～19c	—	(17.0)	—	底面・貝目
54		陶器	鉢	肥前系	18c	—	(7.7)	—	
55		SC39	磁器	カントン碗	肥前	17c 末～19c 前半	—	(5.8)	—
56	SC40	白磁	小杯（猪口）	肥前	19c	(6.0)	(3.5)	(3.0)	
57	SC42	陶器	蓋物の蓋	関西	18c 後半～19c	—	6.3	1.4	
58	SC50	染付磁器	端反碗	愛媛（砥部）？	19c 中頃	—	—	—	外面：多重圏紋

第3表 出土遺物観察表

No.	出土遺構	種別	器種	産地	年代	法量			その他
						口径	底径	器高	
59		陶器	碗	(産地不明)	18 c 後半～19 c	(11.6)	—	—	
60		染付磁器	花瓶	肥前系	19 c	—	(5.8)	—	
61		青磁	香炉入	肥前 (波佐見)	18 c	(10.9)	—	—	
62	SC50	土師質				—	(9.6)	—	
63		陶器	鉢 (水瓶)	瀬戸美濃系	18 c 後半～19 c	—	(8.6)	—	
64		陶器	播鉢	関西系	19 c	—	(7.6)	—	
65		土師質	焙烙			—	—	—	
66		白磁	紅猪口	肥前系	19 c	5.4	2.2	2.0	
67		磁器	小杯	肥前 (初期伊万里)	17 c 中葉	—	(2.7)	—	
68		磁器	小杯			—	—	—	
69		染付磁器	碗	肥前系	19 c	11.0	4.6	4.8	
70		磁器	大ぶりの碗	肥前系	19 c	—	(5.6)	—	
71		陶器	皿	(産地不明)	18 c 後半～19 c	9.4	4.0	4.3	
72		陶器	碗	肥前系 (京焼風)	17 c 後半	8.8	5.0	5.9	
73		白磁	碗 (朝顔形)	肥前系	18 c 中頃	—	4.4	—	
74		陶器			18 c～19 c	—	4.2	—	
75		染付磁器	紅猪口	肥前系	19 c	—	2.7	—	
76		染付磁器	碗	肥前系	18 c～19 c	—	4.8	—	高台内：「大明年製」 焼成不良
77		陶器				—	(4.0)	—	
78	一括	染付磁器	碗	肥前系	18 c～19 c	—	(4.0)	—	蛇の目釉剥ぎ
79		陶器	皿	肥前系	17 c 前半	13.6	4.8	4.2	砂目積み
80		染付磁器	皿	肥前系	18 c 前半	—	(9.0)	—	
81		染付磁器	皿	肥前 (初期伊万里)	17 c 中	—	(7.6)	—	
82		陶器	鉢 (水瓶)	瀬戸美濃系	18 c 後半～19 c	—	(16.0)	—	63と同一個体
83		染付磁器	花瓶	肥前系	18 c～19 c	—	11.4	—	
84		染付磁器	小皿		17 c 後半	—	—	—	型打ち
85		陶器	鬚水入れ	瀬戸美濃系	18 c	—	—	—	
86		白磁	紅皿		19 c	—	14.4	—	
87		陶器	徳利	肥前	17 c 後半～18 c	—	—	—	
88		陶器	播鉢	薩摩 (苗代川)	18 c 後半以降	—	—	—	
89		陶器				—	—	—	
90		白磁	戸車	肥前	19 c	5.4	—	1.1	
91	SC10	瓦質	軒丸瓦			—	—	—	
92	SC50	瓦質	軒丸瓦			—	—	—	
93	SB1P5	瓦質	丸瓦			—	—	—	
94	SC1	瓦質	平瓦			—	—	—	
95		瓦質	平瓦			—	—	—	
96	SC4	瓦質	平瓦			—	—	—	
97	SC22	瓦質	軒平瓦			—	—	—	
98		瓦質	平瓦			—	—	—	
99		瓦質	平瓦			—	—	—	
100	SC50	瓦質	平瓦			—	—	—	
101		瓦質	丸瓦			—	—	—	
102	一括	石	砥石			—	30.4	—	
103		石	砥石			—	31.4	—	
104		石	砥石			—	(2.8)	—	
105	SC41	石	磨石			—	—	—	
106	SC38	石	火打石			—	(5.3)	—	チャート
107	SP1	土師質	土製人形			—	—	—	「天神」人形
108	SP2	土師質	土製人形			—	—	—	「天神」人形
109	SC38	磁器	水滴			—	—	—	仮名手本忠臣蔵の人形を模したもの
110	SC40	土師器	土製人形			—	—	—	
111	SC10	土師器	土製人形			—	—	—	
112	一括	土師器	土製人形か			—	—	—	
113	SC40	ガラス玉か	数珠玉			—	—	—	
114	一括	銅器	留め金具			—	—	—	
115	SC10	銅銭	寛永通宝			—	—	—	
116	一括	銅銭	寛永通宝			—	—	—	

第Ⅲ章 調査の成果

調査面積が限られていた上、出土遺物も多くなかったため、考察の範囲も限られる。

今回の調査では中世・近世の遺物が出土した。中世は、土師器皿の小片が2点出土したのみである。佐土原城の築城は中世に遡り、今後報告書が刊行される6次調査でも中世の遺物・遺構は確認されていることから、調査地も中世に屋敷地が存在した可能性はあるものの、具体的にそれを示す遺構は確認できなかった。

近世は比較的多くの遺物・遺構が確認された。遺構のうち掘立柱建物は5棟に及ぶ。柱穴出土の遺物が少ないために年代は不明だが、掘立柱建物1・3・4、掘立柱建物2・3は重複することから、掘立柱建物の時期は複数にわたると考えられる。このうち掘立柱建物1の分布する場所は土坑が疎らである。これは、長期間使用されたためであろう。

土坑は調査区中央部に密集する傾向が認められた。浅く、小規模な土坑が切り合う点や、埋土における炭の出土などから、土坑の多くはごみ穴と考えられる。限られた敷地においてごみ穴が多数作られた点を考慮すると、調査区中央部は庭であった可能性が高い。土坑内出土遺物は、同じ土坑でも複数の時期の陶磁器が混在することが多く、埋没の年代が特定できるものは極めて少ない。これは、庭で繰り返しごみ穴が掘られては埋められた結果と考えられる。

出土遺物に目を転じると、陶器・磁器共に肥前産が主体を占めており、関西、瀬戸美濃産はごく少数である。薩摩焼は、高岡麓遺跡では大甕や土瓶などの陶器類の殆どを占めていたが、本調査における薩摩焼は陶器類の中でも決して多いとは言えず、日常用具の流通における宗藩の影響はさほど強くなかったと考えられる。一方、白薩摩も皆無であったが、付近の佐土原城跡第6次調査では一定量出土している。白薩摩が贈答用陶磁器としての性格を備えていたことを考えると、本調査で皆無だった背景には身分が関係したと考えられる。

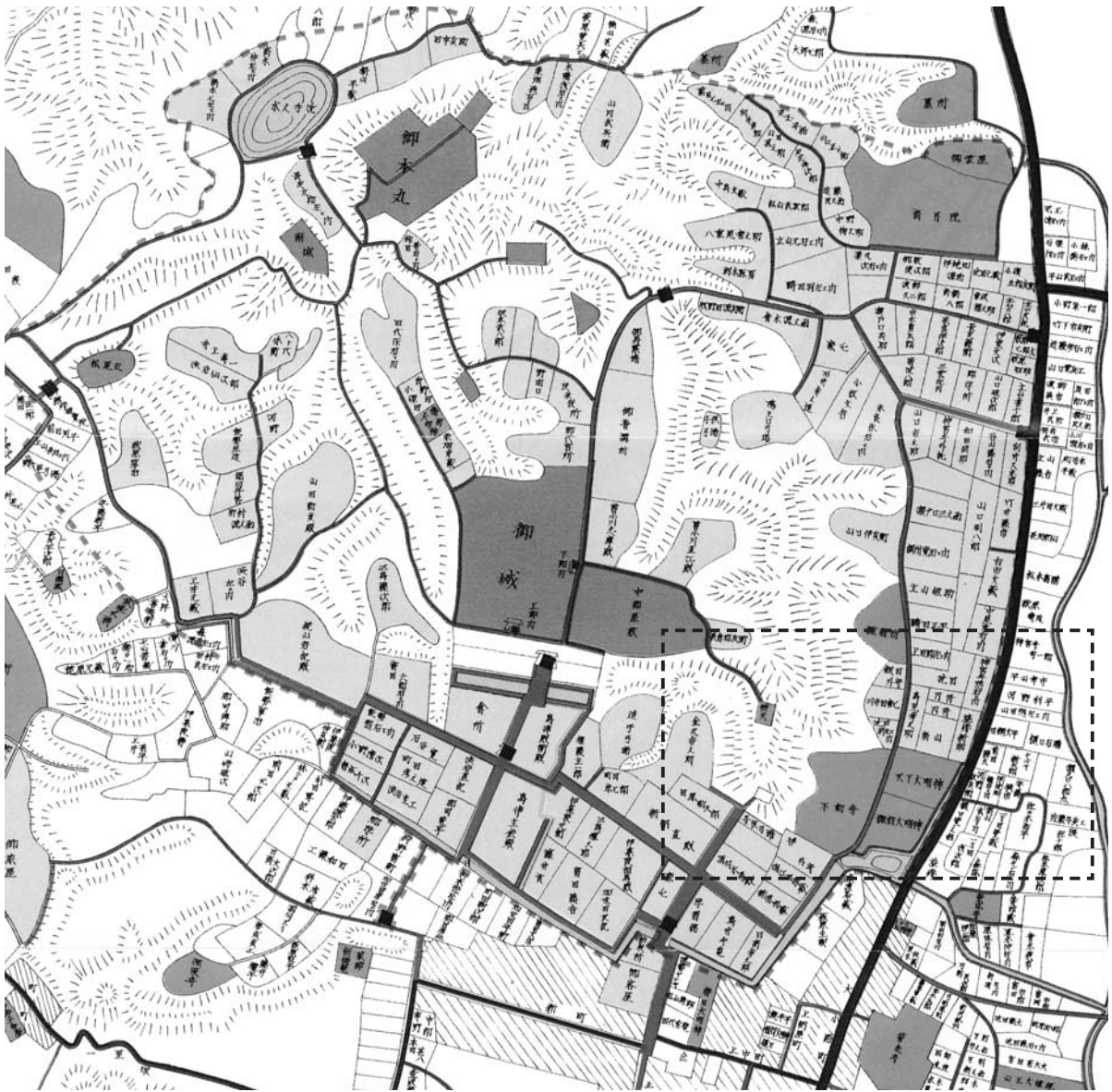
佐土原には、安政年間作成と伝えられる城下絵図が残されている。現在の地図と照合すると、佐土原城の北側は佐土原藩に仕えた武家屋敷の名が記されており、調査地付近には「池田」、南は「島見幸之助」の名を見ることができる（外に「内侍」とあるが、詳細は不明である）。なお、幕末作成と推定される「追手・鳴之口・野久尾・十文字諸士分限帳」には「池田舟外」「島見勘右衛門」の名前が残されている。分限帳にある姓はどちらも一軒のみであり、幕末の段階で両家が調査区内に存在した可能性は高いと考えられる。二家とも三十五石扶持であり、中小姓を務めていたとあるものの、出自やその後の詳細は不明である。このように、佐土原藩に残された文献は限られていることから、今後も継続的な発掘調査を行い、成果を積むことが必要であろう。

参考文献

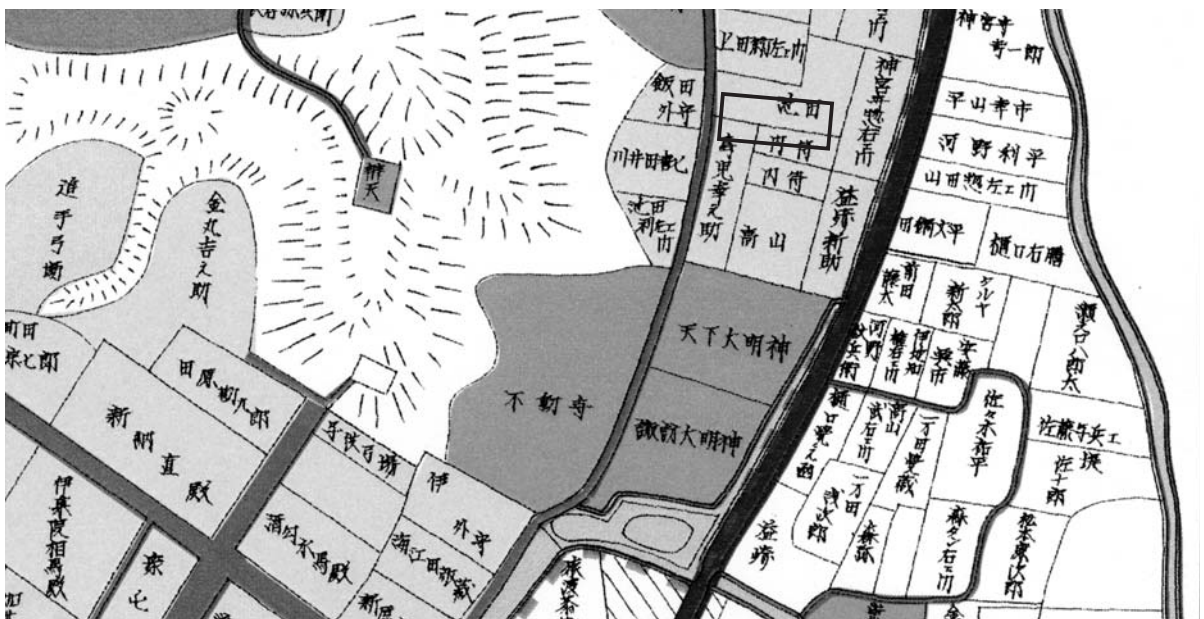
宮崎県 1997「宮崎県史 史料編 近世6」

宮崎市 2007「史跡佐土原城跡保存管理計画書」

宮崎市教育委員会 2012「高岡麓28・31・32地点」宮崎市文化財調査報告書第90集



第16図 佐土原城下絵図（伝安政年間作図）における調査区推定位置（黒破線）
 ※「史跡佐土原城跡保存管理計画書」より引用



第17図 佐土原城下絵図（伝安政年間作図）における調査区推定位置図（黒枠）
 ※「史跡佐土原城跡保存管理計画書」より引用

写 真 図 版



佐土原城跡第8次調査航空写真（北西から）



調査区遠景 (1)



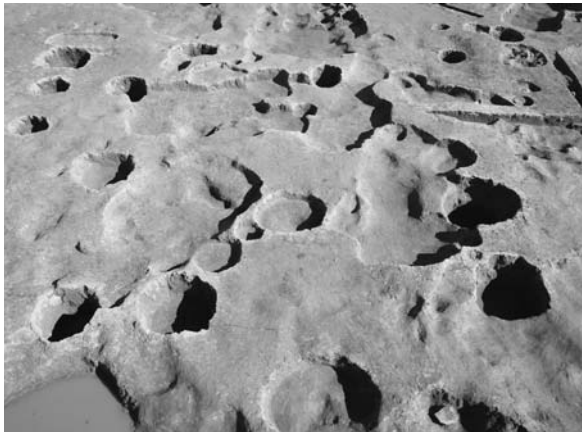
調査区遠景 (2)



掘立柱建物 1 検出状況



掘立柱建物 2 検出状況



掘立柱建物 3 検出状況



掘立柱建物 4 検出状況



土坑32、33、45検出状況



土坑群検出状況 (1)



調査区内遺構検出状況



土坑群検出状況（2）



土坑50遺物出土状況



調査風景



土坑 1 出土遺物



土坑 4 出土遺物 (1)



土坑 4 出土遺物 (2)



土坑10出土遺物



土坑38出土遺物 (1)



土坑38出土遺物 (2)



土坑50出土遺物 (1)



土坑50出土遺物 (2)



出土磁器



出土陶器 (1)



出土陶器 (2)



出土銅銭



出土人形類



その他の出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	さどわらじょうあと						
書名	佐土原城跡 第8次調査						
副書名	佐土原変電所増強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査発掘報告書						
シリーズ番号	第107集						
編集者名	金丸武司						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎市橘通1丁目14番20号						
発行年月日	2015年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
さどわらじょうあと 佐土原城跡	みやぎけん 宮崎県 みやぎし 宮崎市 さどわらちょう 佐土原町	45201	11-045	32° 03' 04" 付近	131° 25' 34" 付近	200121126) 20130215	400㎡
調査原因	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
佐土原変電所 増強工事	城館跡	中世 近世	掘立柱建物 土坑 ピット		陶器 磁器 銅銭 砥石 瓦		

宮崎市文化財調査報告書 第107集

佐土原城跡第8次調査

平成27年3月

宮崎市教育委員会